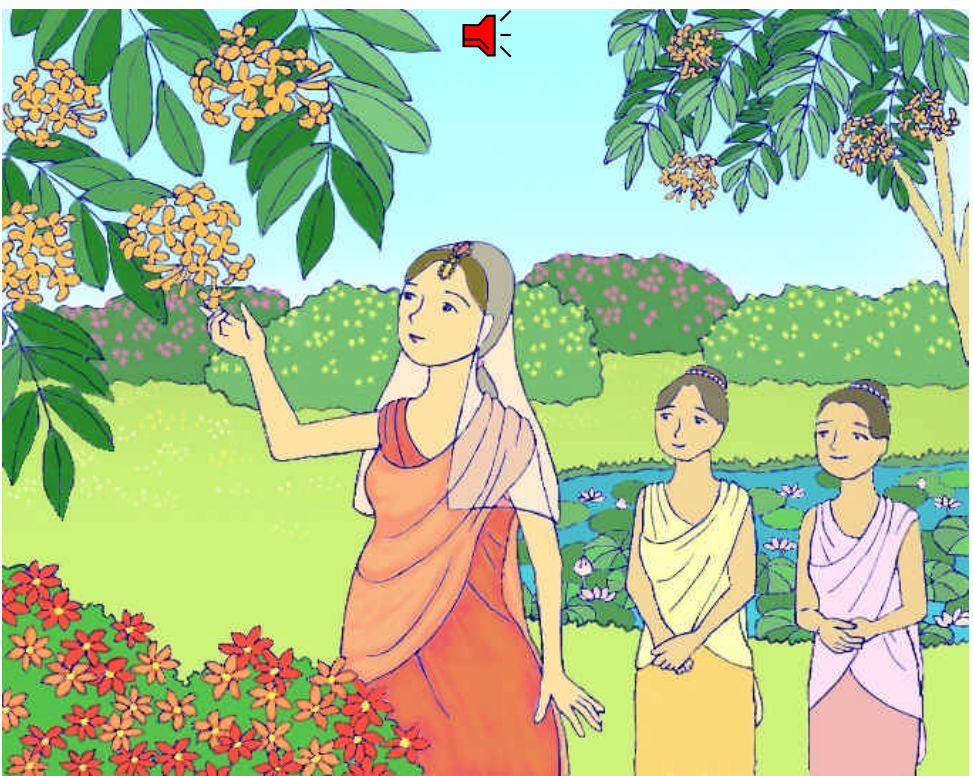


② マーヤーさまの夢

そんなある夜のことで、
マーヤー様は、不思議な夢をぐらんに成りました。
それは、牙が六本も有る、真っ白い象が空からおりてきてマーヤー様のお腹にスーッと入る夢でした。
マーヤー様から、この不思議な夢をお聞きに成った王様は、すぐに夢を占う占い師をお呼びに成りました。
占い師は、マーヤー様の夢の話を知ると、うれしそうに言いました。
『王様、これはとてもおめでたい夢で、御座います。この国に、王子様がお生まれに成る知らせで御座います。』
占い師の言葉を聞いて、マーヤー様は、たいそう、お喜びに成りました。
国中の人々も大喜びで、王子様がお生まれに成る日を、首を長くして待ちました。

マーヤー様は、ラーマグラマールと言う村のデーバダハと言う、お城の国王の娘と言われております。
マーヤー様は、妹のマハープラジャヤーパティール（摩訶 波闍波提）と一緒に釈迦族のストダナ王のもとに嫁がれました。



③ ルンビニの花園

いよいよ王子様が、お生まれに成る日が近づいてきました。
マーヤー様は、ご出産の為、母国のラーマグラマへ、里帰りされる途中、ルンビニと言う所の花園で一休みされました。
ルンビニの花園には、色とりどりの花が咲き乱れていました。
『まあ、なんてきれいな……』
マーヤー様が美しい花に、そっと手をさしのべられた、その時、

「胸の思いがみな消え失せて、
禅定にあるにさも似たり」

マーヤー夫人は、ブツダが体内に宿った時の様子を、こう詩にしています。
又「心ただやすらかにして、清きうれしみあり」
マーヤー様は、絶対悪い事をしないと十善を誓われました。いわゆる胎教です。

そして、ルンビニ園の無憂樹という大変大きな木のもとで、ブツダが誕生されされました。



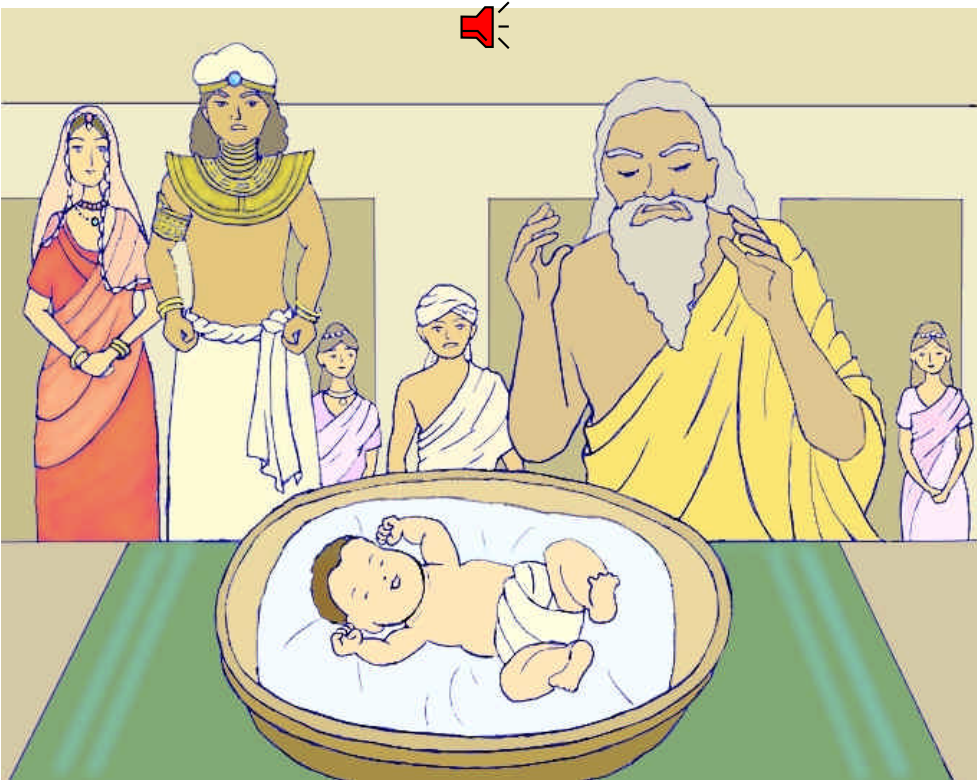
④ お誕生
かわい元気な赤ちゃんが、お生まれに成りました。あたりには、美しい音楽が流れ、甘い香りの雨が降り注ぎ、王子様の体をきれいに洗い清められました。どうでしょう。
王子さまは、すくつと立ち上がり、七歩、歩いて、天と地を指さして、『天上天下唯我独尊（天にも地にも我ひとり尊い）』と言われたので有ります。
四月八日のことでした。

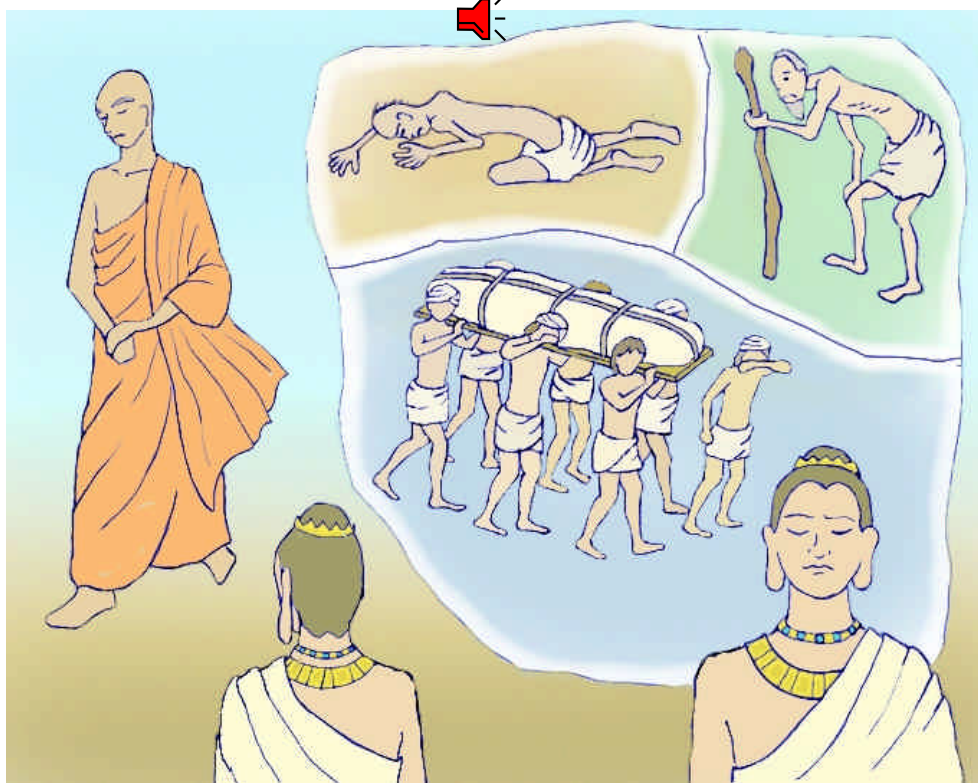
天上天下唯我独尊とは、思い上がりの言葉として、よく誤解されがちですが、この教典は、釈尊入滅の後、数百年たって出来た、いわゆる偉人伝です。
お釈迦様は、本来言葉や文字の無い、大宇宙の《実相》の相、そのありのままのすがたが一番尊いと、凡夫の私達に理解しやすいように、実相の姿を、ご自身の体や言葉に置き換えて、又、後のお弟子さん達が、このような偉人伝として表現されたので有ります。
シッダルタ王子は、生まれながらにして、仏、ブッダ（目覚めた人、真理を体得した人）としての因縁を持って居られたので有ります。

⑤ アシタ仙人の予言

王様は、王子様にゴータマ、シッダルタと言う名前をおつけに成りました。
そんなある日、お城にアシタ仙人と言う占い師が、お祝いにやってやってきました。
アシタ仙人は、シッダルタ王子を人目見るなり言いました。
「なんとりつばな王子様。もし出家されたならば、世界中の人々を救うブッダと成られることでしょう」と予言されたのであります。
ところが王子誕生の七日かの後、マヤー様は、産後の病にて、幼い王子様を残してお亡くなりになってしまいました

お母さんを失ったシッダルタ王子は、お母様の妹マハーブラジャヤーパティから、お乳をもらって育てられます。
しかし、マハーブラジャヤーパティにも赤ちゃんがおられた（後の阿難尊者）が、自分の赤ちゃんは、乳母にまかせて自分のお乳をシッダルタ王子に与えられたそうです。
乳飲み子を残して先立つマヤー様に、妹さんは、『お姉さん、王子の事は、何も心配しないで下さい、私がりつばに育て上げます』と言う会話が聞こえてきそうですね。





⑥ 四門出遊

元気に、すくすくと大きく成られた王子様は、ある日、初めて、お城の東の門から外へ出て、ぼろぼろの服を身にまとい、よろよろと歩いて行くおじいさんを、ごらんになられました。又ある日、南の門から出て、病気に苦しむ人をごらんになりました。又ある日には、西の門から出て、嘆き悲しむお葬式の行列をごらんになりました。『どうして、この世には、こんなにも苦しく悲しいことが多いのだろう』王子様の心は晴れません。そんなある日、王子さまは、お城の北の門からお出かけになり、一人のお坊さまにお会いに成りました。その静かな姿を見て、王子様は、決心されました。

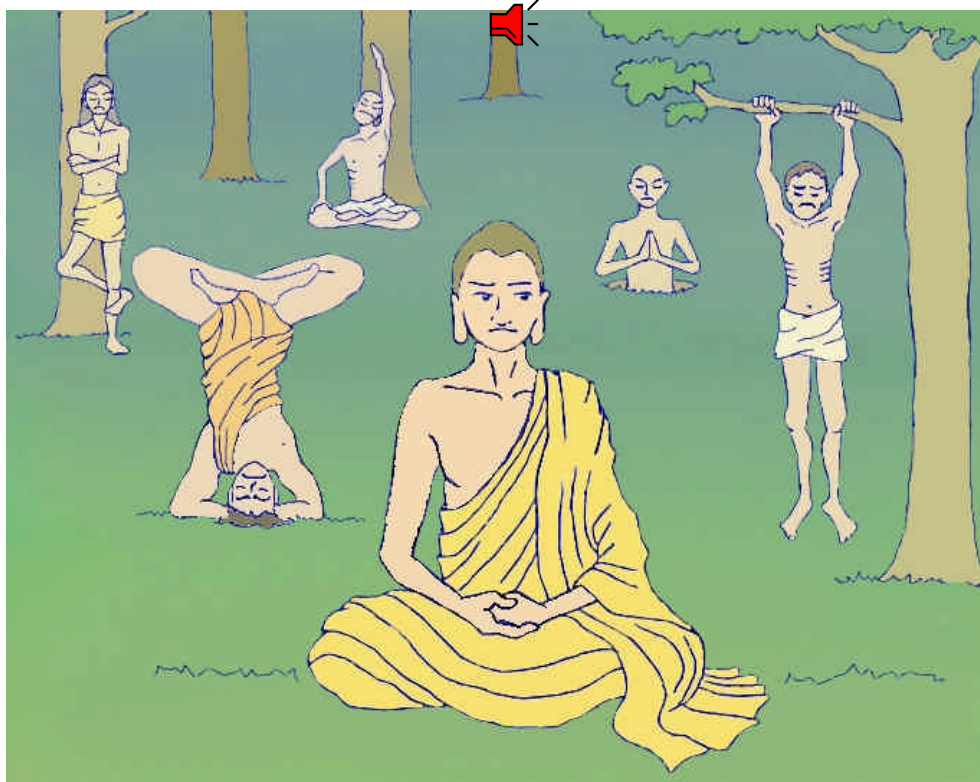
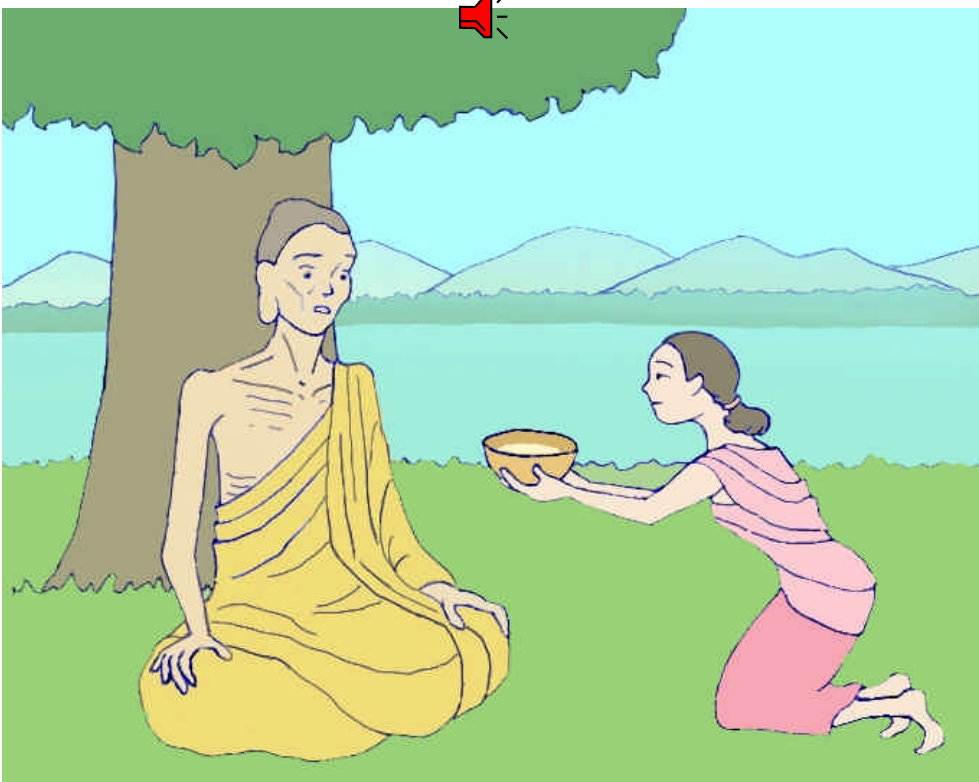
『四苦八苦』

生、老、病、死、の四苦と、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦、の四苦をを合わせて、四苦八苦と言い、転じて非常の苦しみを、意味します。

⑦ お城を出られた、王子さま

それから、何日かたったある夜、王子さまは、しいよいよ、お城を出て行かれることに成りました。チャンナの引くカンタカという真っ白い馬に乗って、だれにも知られないように出て行かれたのであります。『チャンナ、見送ってくれて有り難う。カンタカをつれて、もうお城にお帰り。私は修行をして、きつとりつばなお坊さまに成るからね。お父様に元氣でお暮らし下さいと伝えておくれ』王子さまは、そう言うと、修行のために山奥へと入って行かれました。王子さまが、二十九才のときのことでした。

釈迦族の王子として生を受けた、シツダルタは当然王位継承の地位があるのですが、その地位にとらわれる事無く、出家して、苦しむ人々を救っていきたい、みんなの迷いの縄を解きほぐしたいと常々思っておりました。王子は、そんな思いに伏せる王子を案じて、王子にヤシヨダラと言う妃を迎えます。そして、可愛い子供を授かり、ラーフラと名付けます。王子は、妃のヤシヨダラや可愛い子供をラフラと別れる、偲びがたい思いを振りきって出家されました。



⑧ 王子さまの苦行

その日から、王子さまの苦しい修行が始まりました。食べ物もほとんど食べず、一日中、水の中に座っていたり、燃える火の中に立ちつくしたり、固い岩の上に座り続けたり……。苦しい修行の連続でした。六年もの長い間、こうした苦しい修行を続けられた王子さまの体は、すっかりやせて、弱ってしまいました。でも、どうしたら世の中の人達を幸せに出来るか、分かりません。ある日、王子さまは、こう思われました。『こうして、毎日、自分の体を苦しめているだけでは、何も考えることは出来ない。山をおりて、一人で静かに考えてみよう』

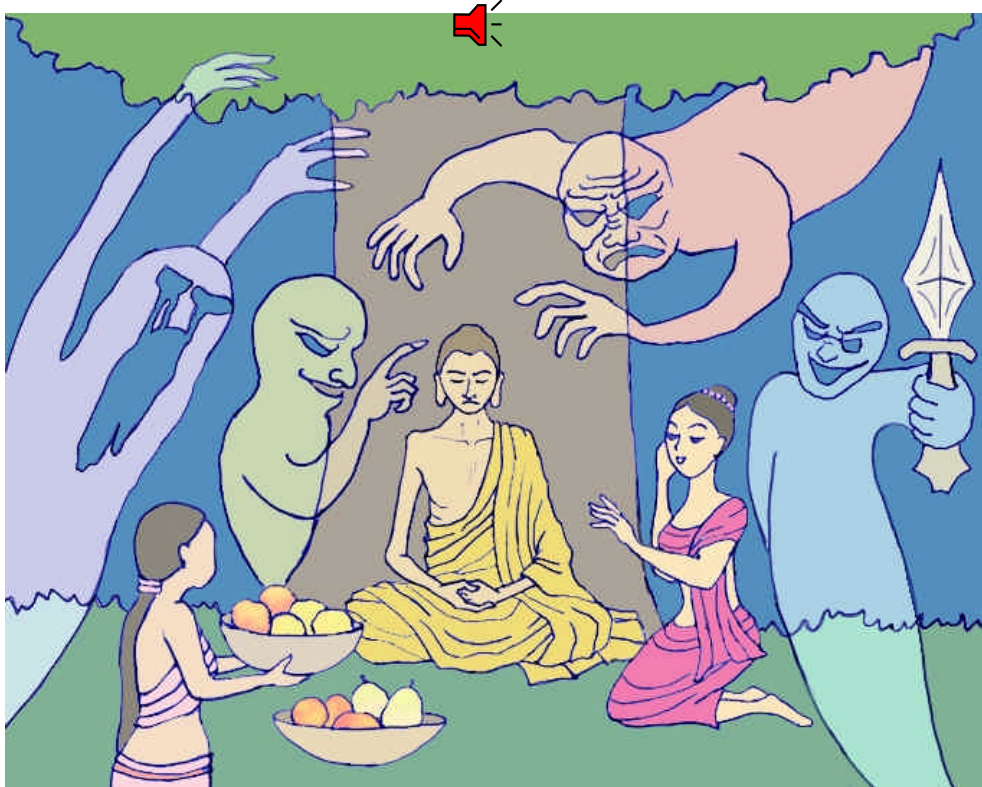
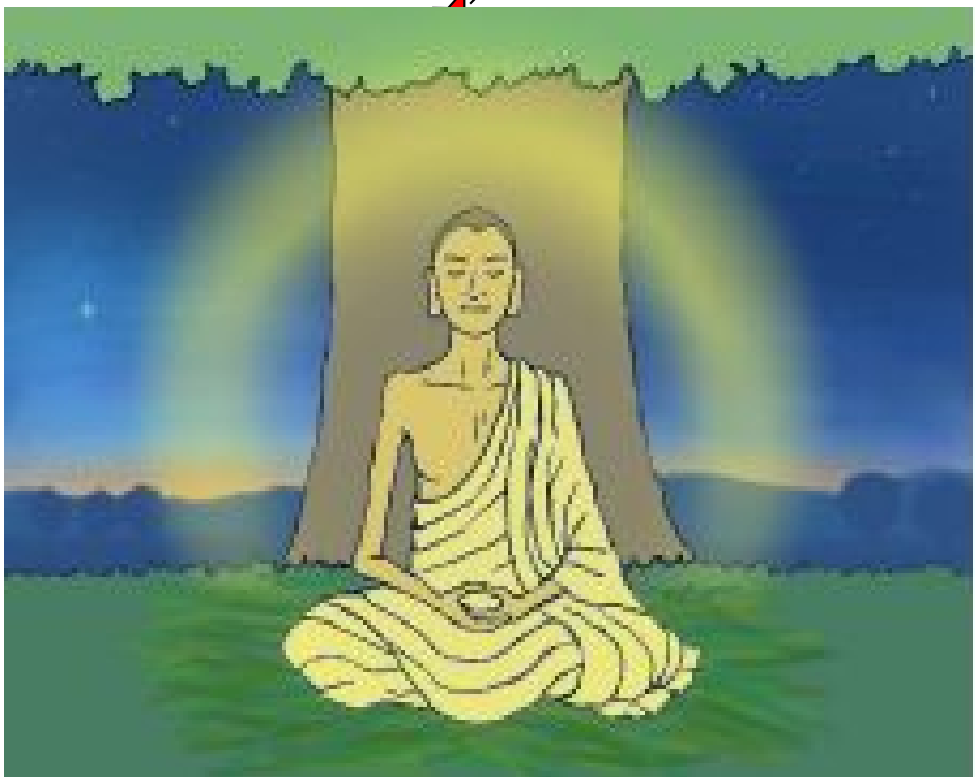
出家された王子様は、お母さんのふるさとラーマグラマーで、髪を剃られました。王子は、「お母さん私は出家します」と報告されたかったような気がします。その後様々な苦行をしても悟りは、開けません。そこでシッダルタ王子は、思うのです。『苦しんで苦しんで、苦しみの修行をしても、結論は、苦しか得られない』と気がつき、苦行を捨てます。その時、五人の仲間、王子様を敗北者と避難してしまおうのです。

⑨ スジャータの真心

山を、おりられた王子さまは、弱った体をニレンゼンガと言う川で清められました。そして、川岸の木陰で休んでいらしやることのできる。近くの村に住んでいるスジャータと言うかわいらしい女の子が、王子さまの姿を見て、「どうかこれをめしあがって元気に成って下さい」と牛乳で作ったお粥をさしあげました。「ああ、これは、おいしい。生き返ったようだ。」王子さまは、喜んでお粥をめしあがりました。「ありがとうスジャータ。お陰でとても元気に成ったよ」

「さあ、わたしは、また一人で修行を続けよう」王子さまは、こんもりと繁った菩提樹の木の下に静かにお座りに成りました。

スジャータと聞くとミルクメーカーの商品名のように思われますが、衰弱しきってしまった、お釈迦様に、乳粥を施し介抱して下さいました尊い娘さんの名前なのです。その当時の修行者は、乳粥の布施は、受け手は成らないと言われておりました。ましてや娘の手から布施を受けるとは……。シッダルタは、完全に挫折してしまっただけで、シッダルタのもとを去って行かれたのです。



⑩ 修行の邪魔をする悪魔たち

王子さまは、くる日もくる日も座り続け、どうしたら世界中の人たちが幸せに成ることが出来るか考えられました。そのようすを見て悪魔たちが集まってきました。「よし、王子の心をためしてやれ」「みんなで修行の邪魔をしてやれ」悪魔たちは、きれいな女の人を集め、王子さまのまわりで歌わせたり、踊らせたり騒がせたり雷をとどろかせて修行の邪魔しようとしてましたでも王子さまは、なにこともないかのように考え続けられました。そこで悪魔たちは、大風を巻き起こし、大雨を降らせ、ついには剣をふりかざしておそいかかりました。それでも王子さまは、びくともしません。「だめだ、だめだ、負けた」とうとう、悪魔たちは、あきらめて、どこかへ消えてしまいました。

悪魔とは、自分の中に住んでいる、自我の心でわがままの自我と、真の自己、己との格闘になるわけです。シツダルタは、六年の苦行のすえに得た、堅固たる心身を持って悪魔を追い払うのです。

⑪ おさとり

ほんのりと明るく成った東の空に、明けの明星が、ちかちかと、またたいていました。王子さまの心の中で、霧がすーっと晴れていきました。王子さまは、おさとりを開かれたのです。人々を幸せにする道を見つけられたのです。「世界中の人々が苦しみや、悲しみ忘れて、幸せになる道は、仏さまを信じ、拝むことだ。私は、これから仏さまの教えを人々に伝えて歩こう」王子さまの体は、朝日の中で美しく光り輝きました。十二月八日のことでした。この日を成道会といます。そして、この日から、シツダルタ王子さまのことを、お釈迦様「ブツダ」と呼ぶようになります。

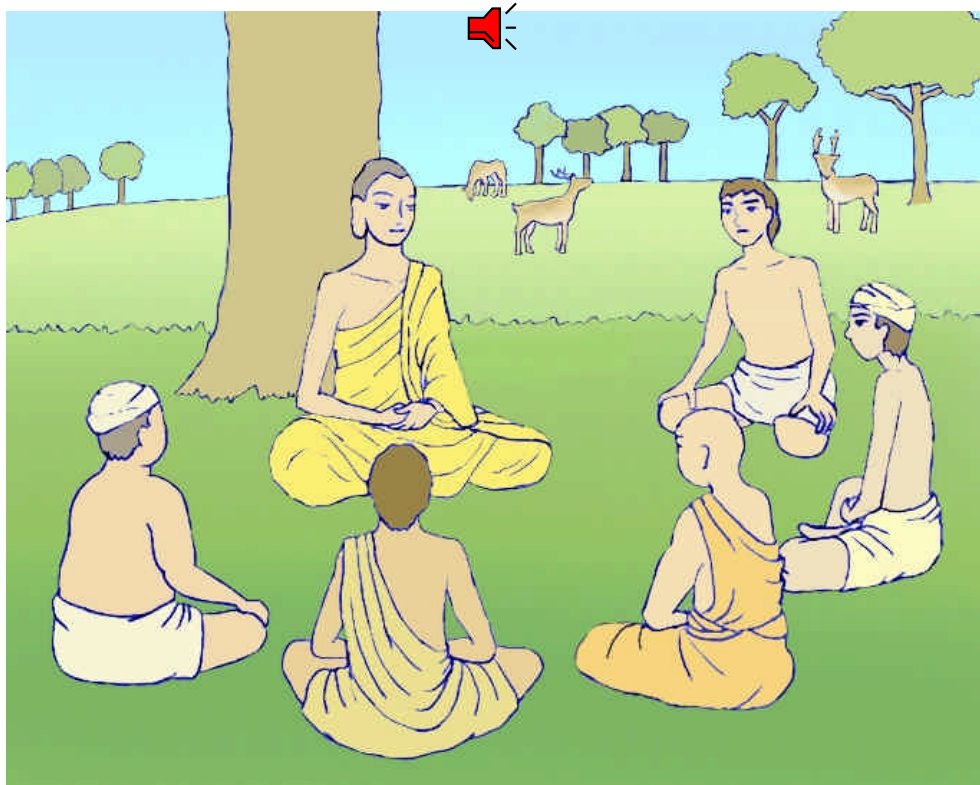
三十五才の十二月八日、シツダルタは、「草木も土も、すべての生き物は、みんな宇宙なのだ。生命は、宇宙なのだ」大宇宙の実相と言う、真理のもとに抱かれて、私達は生かされている。そのありのままの姿を、ありのままに生かさせて頂く、とらわれのない生き方、この中道の道こそ真実なのだ、と悟られたので有ります。



お釈迦様は、女の子の差し出す小さな明かりを
 「なんて温かくて美しい明かりでしょう。心
 のこもった贈り物が、一番うれしい。」
 ありがとう、ありがとう

⑬ 貧者の一灯

あるとき、お釈迦様がいらつしやるといふ話を
 聞いた町のお金持ちたちは、大きくてりっぱな
 明かりをたくさん用意して、お釈迦様を迎える
 ことにしました。
 でも、ひとりの貧しい女の子には、小さな
 明かりさえ買うお金がありませんでした。
 「そうだ。自分の髪を売って明かりを買いましょ
 う。」女の子は、自分の髪を売ったお金で小さな
 明かりを買いました。
 いっせいに明かりの灯った夜の町は、まるで
 昼間のように明るく成りました。
 ところが、いよいよお釈迦様が町にお着きになる
 というとき、突然強い風が吹いてきて、
 お金持ちたちの大きな明かりを全部吹き消して
 しまいました。
 でも、どうしたことでしょう。女の子の小さな
 明かりだけは、消えることもなく、ますます
 明るく光り輝きました。



⑭ 最初のお弟子

尊いお悟りを開かれたお釈迦様は、みんなが、
 幸せになれるように、仏様の教えを伝える旅へ
 と出ていかれました。
 ある村へ行かれたときのことです。
 その村には、昔、お釈迦様といっしょに苦しい
 修行をしていた五人の仲間がいました。
 この五人は、お釈迦様が苦しい修行に負けて
 山をおりて逃げ出したのだと思っていました。
 五人の人は、向こうから来られたお釈迦様を
 みて、口々に言いました。
 「おい、怠け者がきたぞ」
 「だれも相手にするな」
 「口をきくんじやないぞ」
 ところが、どうでしょう。お釈迦様が近づいて
 来られるにつれて、その姿を見ただれもが、
 思わず頭をさげて素直な気持ちでお迎えせず
 にはいられなかったのです。
 こうして、お釈迦様の教えを最初に聞くこと
 に成った五人の人が、お釈迦様の最初の弟子
 と成りました。

お釈迦様の、悟りはあまりにも難解な法にて、
 外の人に法を説くことをためらいます。
 しかし梵天より、泥中の蓮の花の如く、本来美
 しい花を持っていないながら、泥中に埋もれたまま
 では何よりも悲しい、信じ難く、理解し難い法
 なれども、法を説きなさいと進められるのです。

